傳

疵傷阿石冬兒立

闇鳥

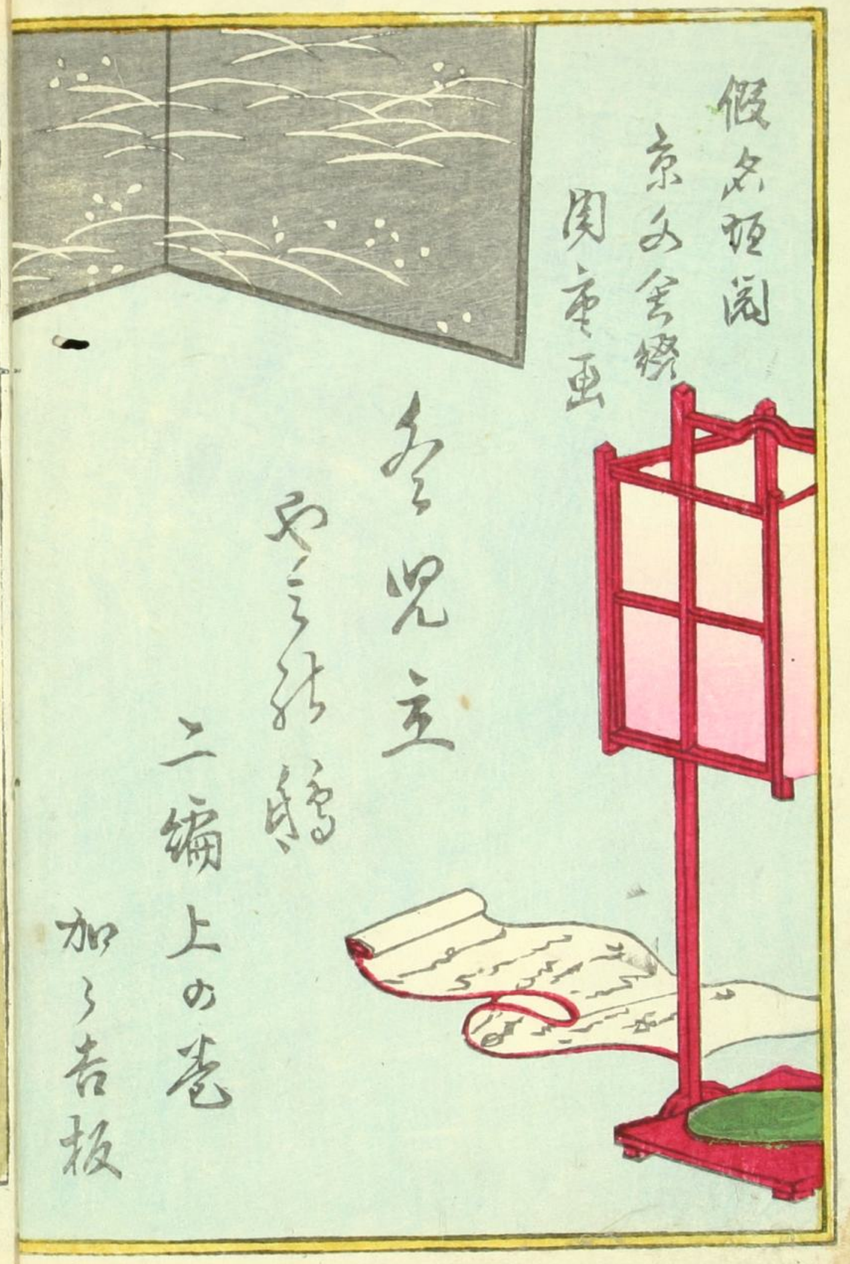
貳編

加賀吉版

假名垣魯文閲
京文舍文京綴
守川周重画

A486
2

<48-8271>



假名垣魯文

京山人繪

関亭画

毒婦立

悪婦伝

二編上の巻

加々古板

夫婦和せざれば家道成らず拙荆墓砧の漢称我が所謂播磨の磑り強られば播盆の底を破り為ふ家具の全きを得ず牝鶏の晨を司ぐ河東の獅吼る俱ふ琴瑟調ふず犬さへ喰ぬ夫婦喧ひ焼継屋の門羅競毒喰ふ皿砂鉢の破損を償ふ術なく室家相異ると以て有り巻中の暴夫赤岩が過激毒婦放石が奸悪世の戒慎とす可き事跡終りて三編を完ふせる文京子の潤色亦以て婦幼の徒然を慰むるに足る夫人情世態よく摸し得る者ハ當時傍訓新聞の雑報より其件数回を渉て東ね稗史一帙ふ縮綴の簡易なる以下次篇の寸断なれば将又一目ふして其大半を解もて至らん大象たるべく鬼園の眼と鰐歯牙を小石に研ぐも可なり

明治十三年三月

假名垣魯文漫記

傳馬街の赤岩
曳手茶屋於元
赤岩妻阿石
赤岩子分小熊

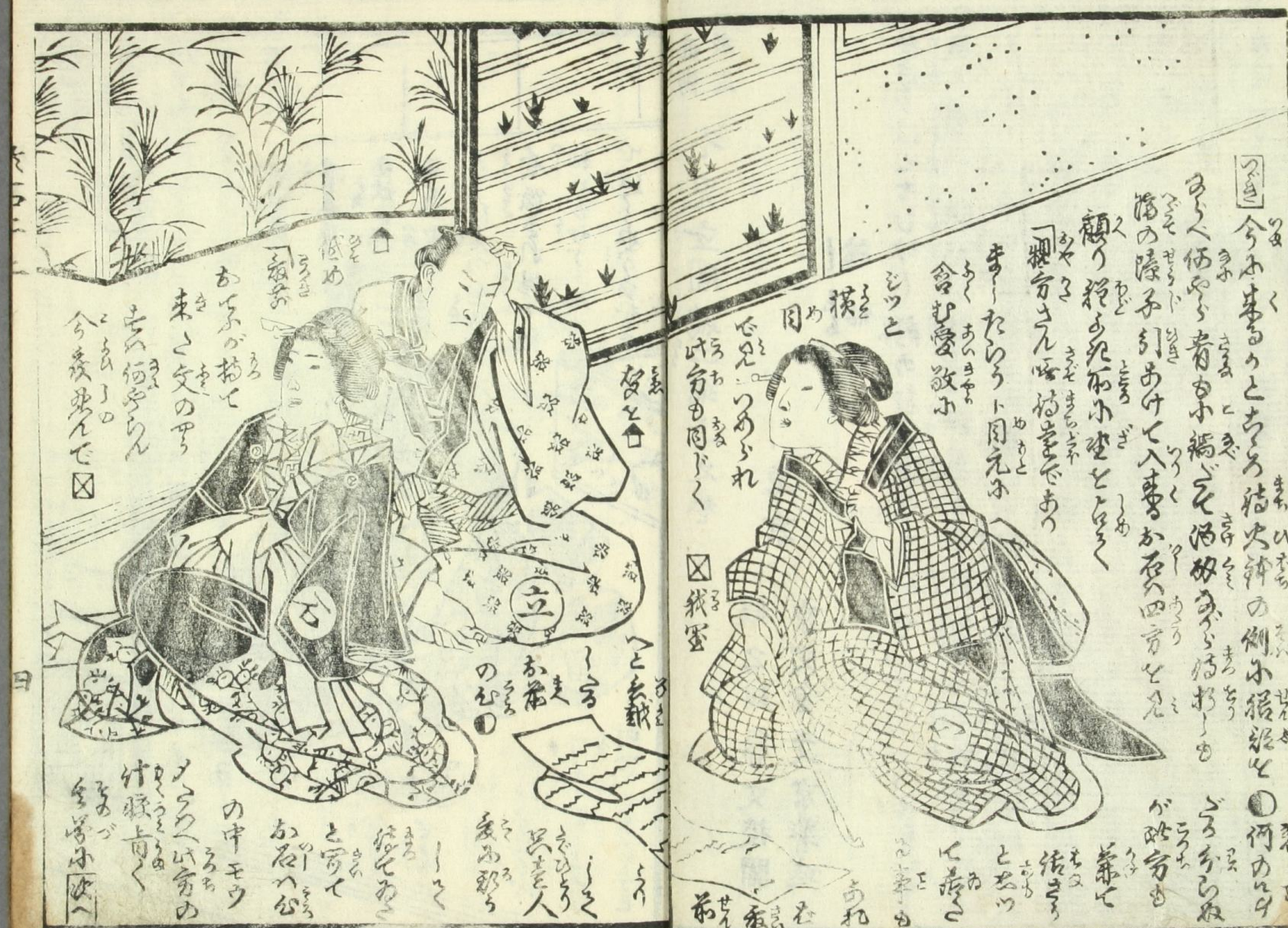
殃傷
於石

冬児立閻鵜二編上之巻

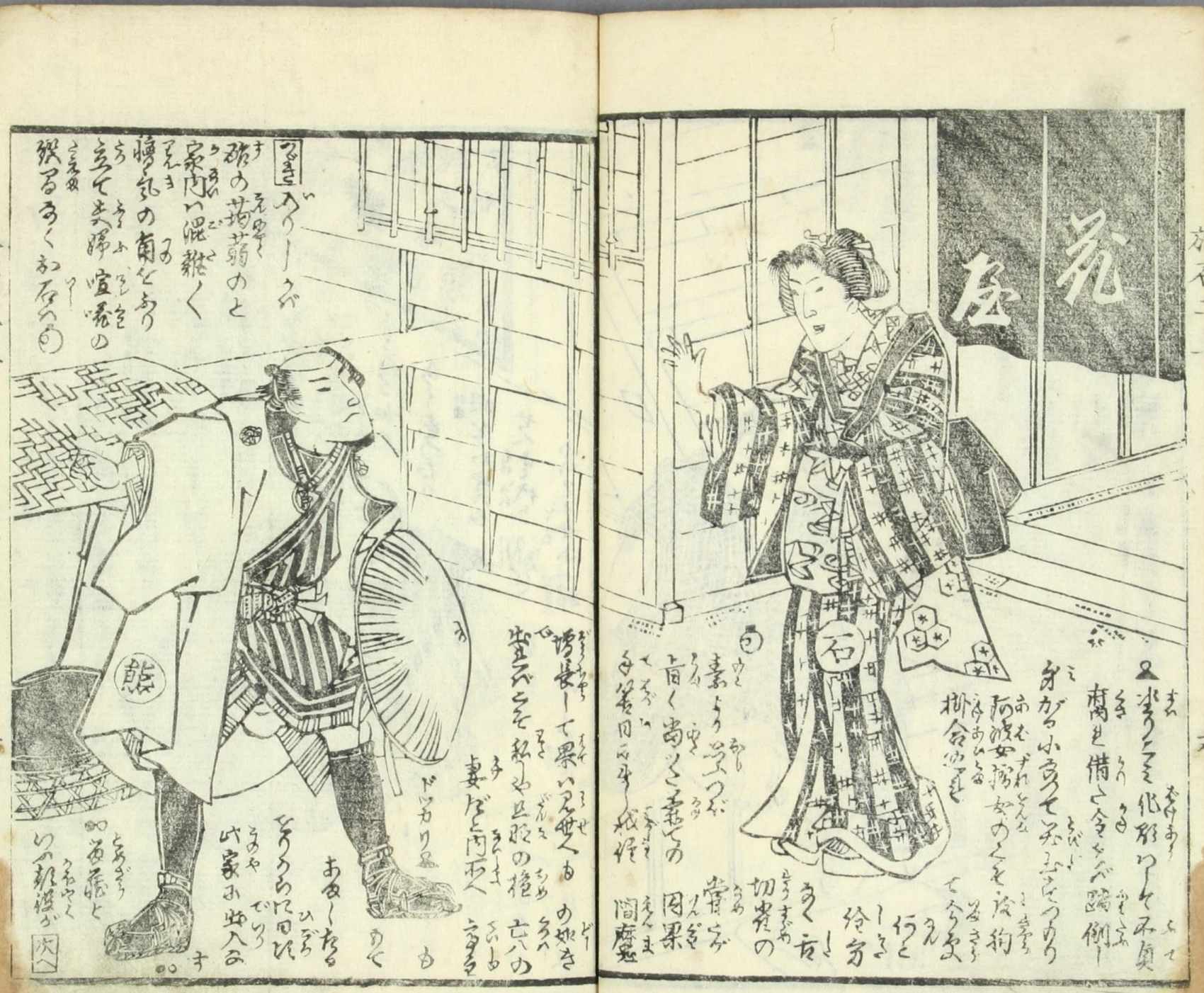
東京　假名垣魯文校閲
京文舍　文京著述

讀始

和さぶばとそもむけし〜彩のむきをもきねく　糸のきるふわられぜト
放人蜀山が後裔を承ける洒落その戯むもも人情をよく穿ち
たる自慰の妙去実みや媚妓の制路のうへふ美万別徒人
の不ちをかもを意夜ぬもて文塔を海棠の情をふ〜むお石が
発出今疾歩んでお目ふかゝを乗し紀事いおめめぐみをとむ
ゆの乱ふ彩の文云笑の中ふ刺を含む茂妹女の右ゑ丸ねが
ふ筆の罠に落ちと祥ふら妙ふのを人いうゆて おいしが色美
ふ達ひとりがあらぶと 肚の裏ふ おめめつぐる今夜の手義 久八


つゞき
今ハ其ものとあらそ結火鉢の側ハ狐狸と
あらく伝やら青ものハ縞ゞ
猫の隙ハ引あけて入来るか
顧り給ハ死ハ塗とと
親方さん咄ハ達ものであつ
ま〳〵たらう〳〵月元ハ
含む愛敬ハ
ジツと
横目
でもこつめられ
此方も同じく
我蜜
茶
立
立
お茶
の心
人
の中モウ
仕舞上ル
今後ハ

飲酒してあれッそく
こと男の
◎猿
捻つてもそこ
風情流石
老狐の
留
河漕舟
阿
弘綱の
仕
森の女房の尊
森の女房の尊
鼻息のそこ
鼻息のそこ
引寄るる
引寄るる
丈夫の糸
糸の
結ぶ
結ぶ
捻ひ森の如何なる
捻ひ森の如何なる
人の
人の
恩
恩


石
熊

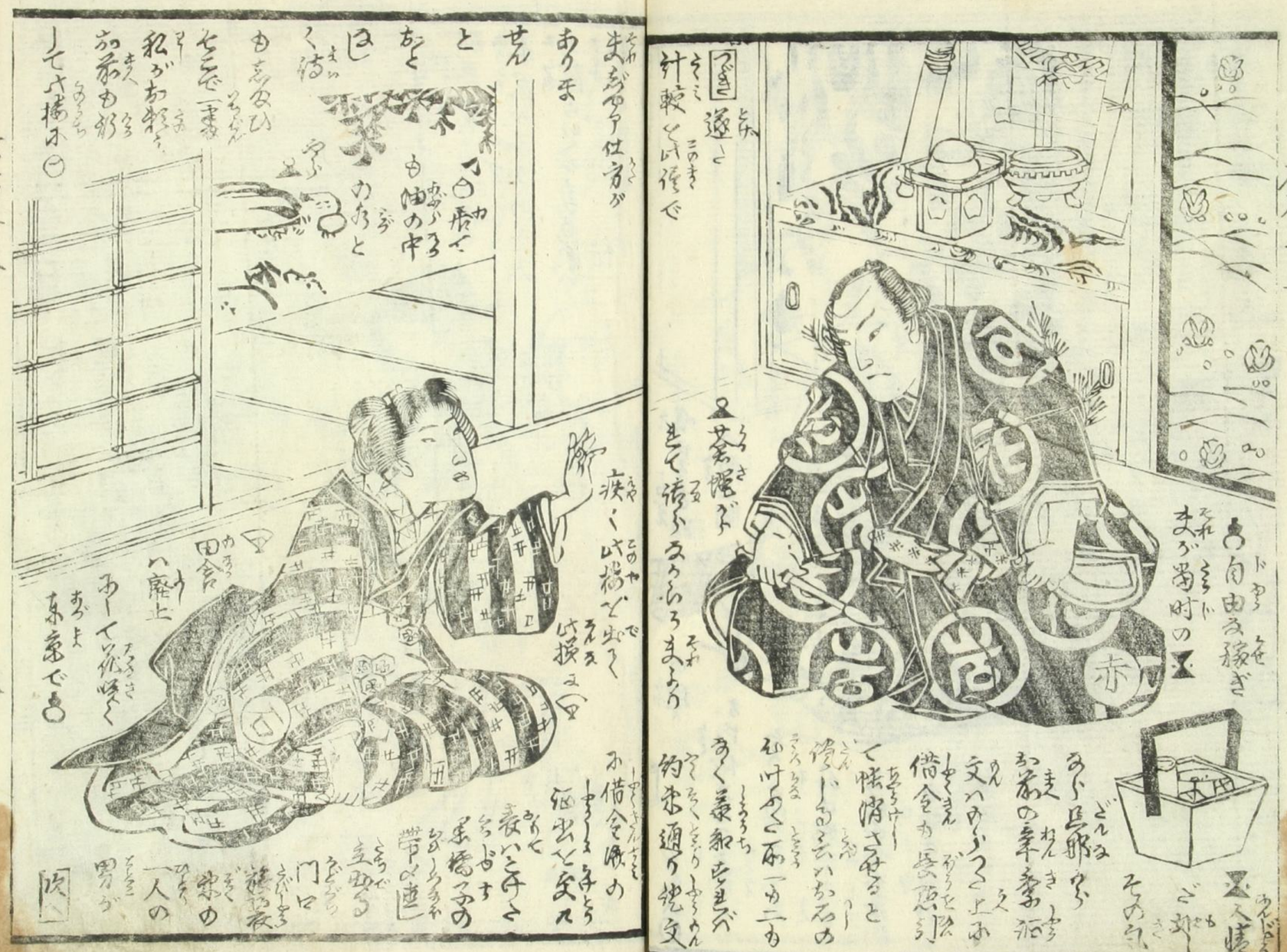
つゞき

その姫様を閉込めて居る人ゝ白ッて云るやう
アノ阿波ゝ様のお屋敷へ長崎箱を元金
笑策策する処の那奴ゝ強い如意ゝせ級のゝ
覚悟めまゝ到底借金ゝんゝゝ人ゝさ
らゞ様ゝ不苦ゝれゝ
ゝちらゝゝしてもモウ
お店ゝ自由ゝ
さるゝ如ゝ
ゝゝゝゝ
せゝ生代り
めゝアノ女ゝ一部
感ゝゝ
やゝゝ

↑或日嵯峨ゝか石ゝ
白ゝ山間ゝゝ内所へ
迫ゝ丑形
の面の皮
と剥き
ゝゝ張の
ゝ接應
松戸ゝ
遊女ゝ
判ゝ
桜井ゝの
ゝ仕

↑互ゝに密々
業ゝ合せ

驚せるゝ
ゝ形と回
の通ゝ
ゝ内儀さんゝ
ゝゝゝ
外の媚ゝの
ゝれゝ今ゝ家新
も出ま動ゝと
丑形の別も
狂ゝある
ゝゝ
ゝれ
ゝ


つぎ
遂と
計較と
赤
入時
疾く
東京で
門口
一人の
男が

京文舎文京綴

守川周重画

藻汐草近世奇談　初編より引續出版

松飾徳若譚　六編より追ゝ出版

今ノ朝の春三組盃　三編より追ゝ出版

御届

明治十一年十二月十七日

東京地本錦繪問屋

神田區仲町二丁目六番地　編輯人　篠田久次郎

日本橋區米沢町一丁目七番地　出版人　堤吉兵衛

渡辺美方編

冬児立闇鴉

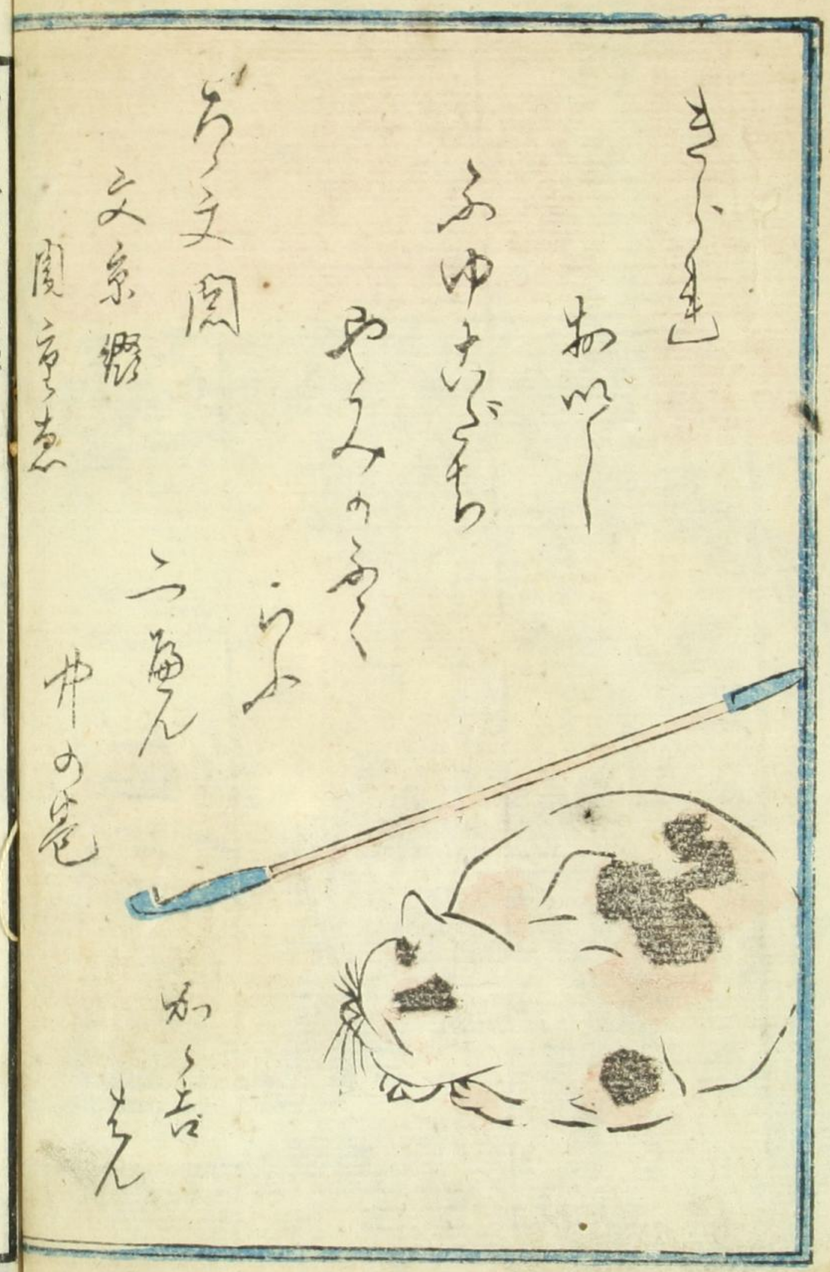
貳編

青盛堂壽梓

假名垣魯文校閲

京文舎文京編輯

中



冬兒立簡鴨 第二編中之巻

東京　假名垣魯文校閲
京文舍文京著述

扨も赤男の子なる小鴨がおなと松戸へ逃ひ来る事周縁と如何ふとゆえ是ん
畢ん留蓮がお嬢と云るい赤男の女房お石なる事又芳五郎と夫婦なる性」の
得細に外で探り方きゝ合多お石が立花屋と那々なりて如何と赤男へ告る板
芳五郎と談通しに逃出せー後赤男でも甲処乙処と尋ぬる中松戸の張の
立花屋で娼妓お多ゝ居るとの芳五郎と求めと来るゝ排合て取庚さんと呼ぶ彩ゝ赤男に成る大家の
内を問ふと求めと来るゝ排合て取庚さんと呼ぶ彩ゝ赤男に成る大家の
家ひまて来て玉へ逃むきて輪らく立て立ゝ今夫い自身お松戸へ彩
立花屋へ排合人と呼ぶ取人芳花ゝ知ぶせふ走探玉ゝ居る彼小鴨に要細と
お待ち取らせー　のゝ為と再縁もお石い赤男分へ帰くゝ居ゝ

つぎ二ツ
三ツの打
擲と受
るとゆ
たを
の苦痛
なきぢ
ず楽ゞ
絶でる
ッ
と

六

○或日陸軍
の親玉
参省
するとて
宅を出で
田町のしま茶
屋の大和屋の女
房へ松戸驛の玉乳
屋と銀座の中ほど
おくに松戸へ寄れて来
るものを不審あり出
ち居ほ坐がるぐるの
宮ほ紙ひの中ほ一通の
あるうるぶうへ白英連田
町ほ事う大和屋へ寄
別ゞ密意ほしが女房
あるを玉乳やでおしへ
知ゝ中るれべマアヤ言へと

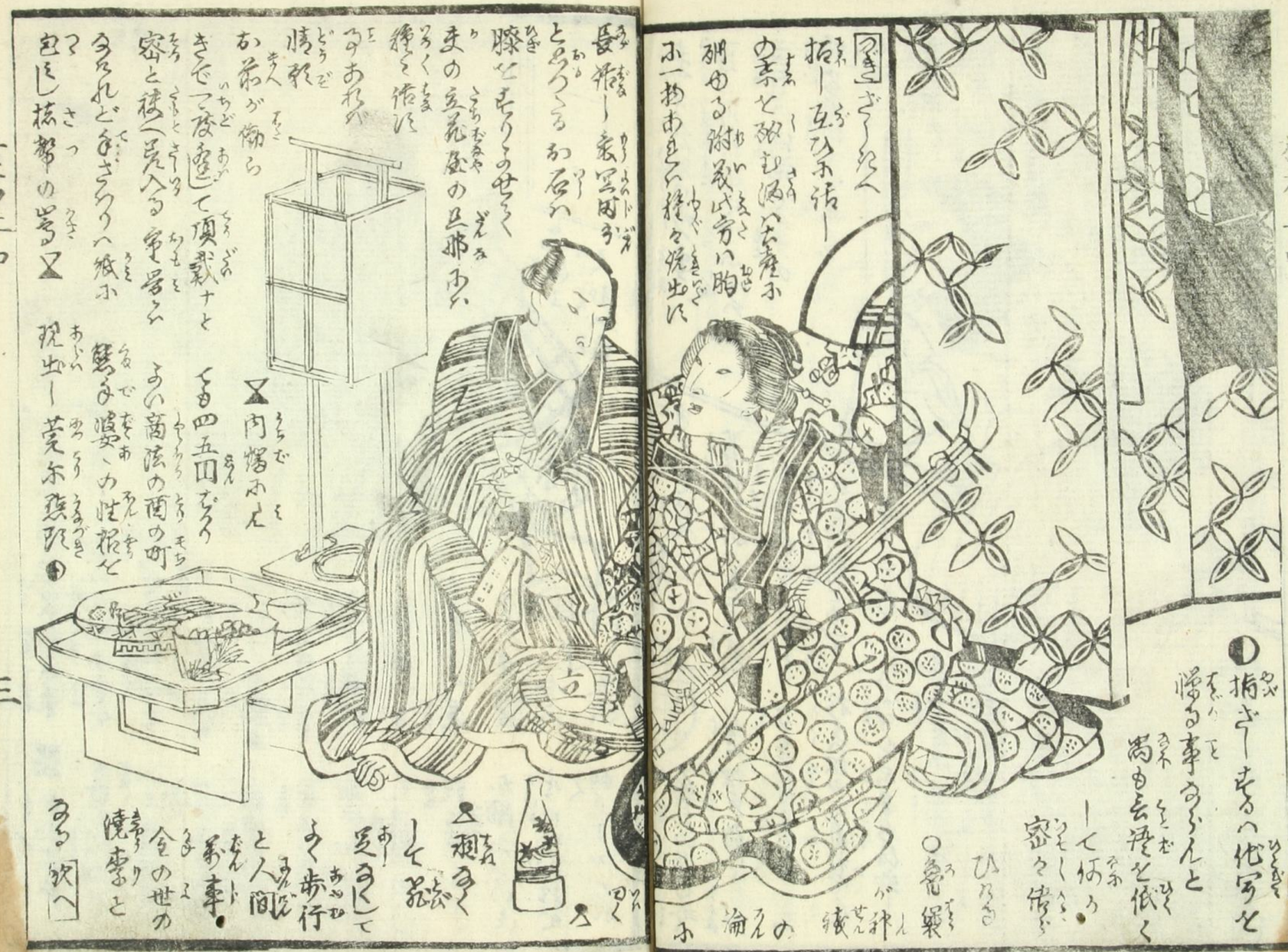
次

素ゞ後脇の坂ゝ安
一月二月経過ても中ほ今へ
玉乳の酒越くとえの
婦ゞを添して居ゞ
ほ
ぬべ松戸
踊る玉乳
屋へ同地を仕繰
へ者ゝへ彩ゝ宗庵
せ出せーと出アノ鼻下長
の玉乳屋をキウ一探ため
ゆんで断絶

七

苦情を絶さぬ中ほ
別が出そうゝ
又も奸智とめゞ
ち

七



つぎ 別あて

◎お石へ引きあて

◎の女房お金と

おへて夫婦屋と

遊廓の芸尾と

後妻ーお惣お

へ暇の為紀生

業ら弥に

尚雄のる

お春とて異

生たる

金へ

五六

◎お出さて

くひて使めらく

山の森の書紀

筆あらじ鏡

妖中へ媚く

云の墓も

あてこび物如

是世感のと

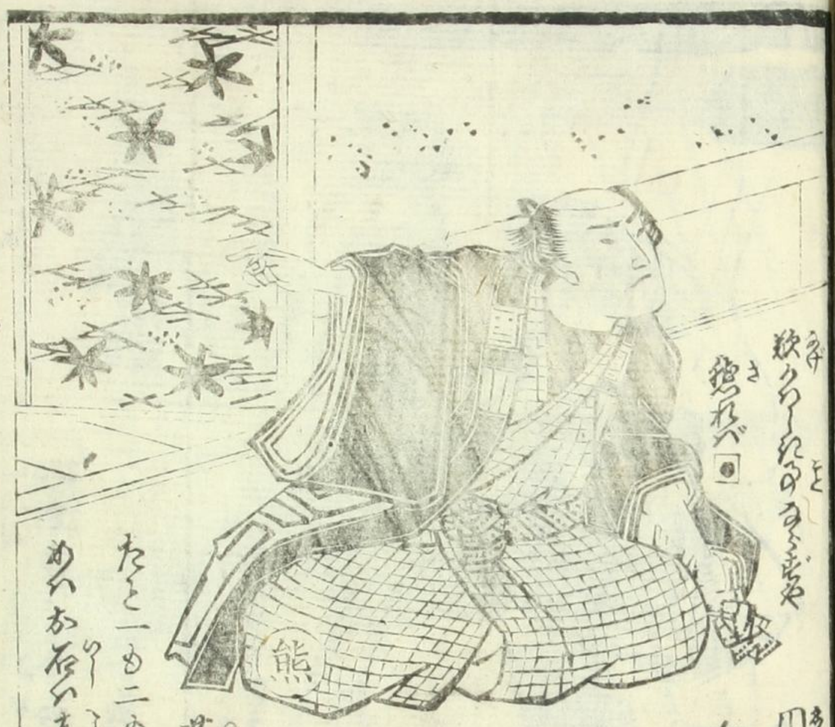
狂ちくと

お船お之め

宝日へ忍れて

久

解りしがこれ



欺くるーれの為に

為れば◎

円尚上芝尾

とはんとくひ

旨く用捷

あさみら也

ちくと墓平

うへ暇来る

家さ淡き

の懐ろ筆

彼コリヤこの

墓ホ市りつの

たと一も二もあく春迎

めへお石へ森とび

ありお春ちへ

回く魚龍屋へ

赴むき好撰会

とはんと笹の交

家と個ホうさし

て云々と発話

きド

ちりの遊後に

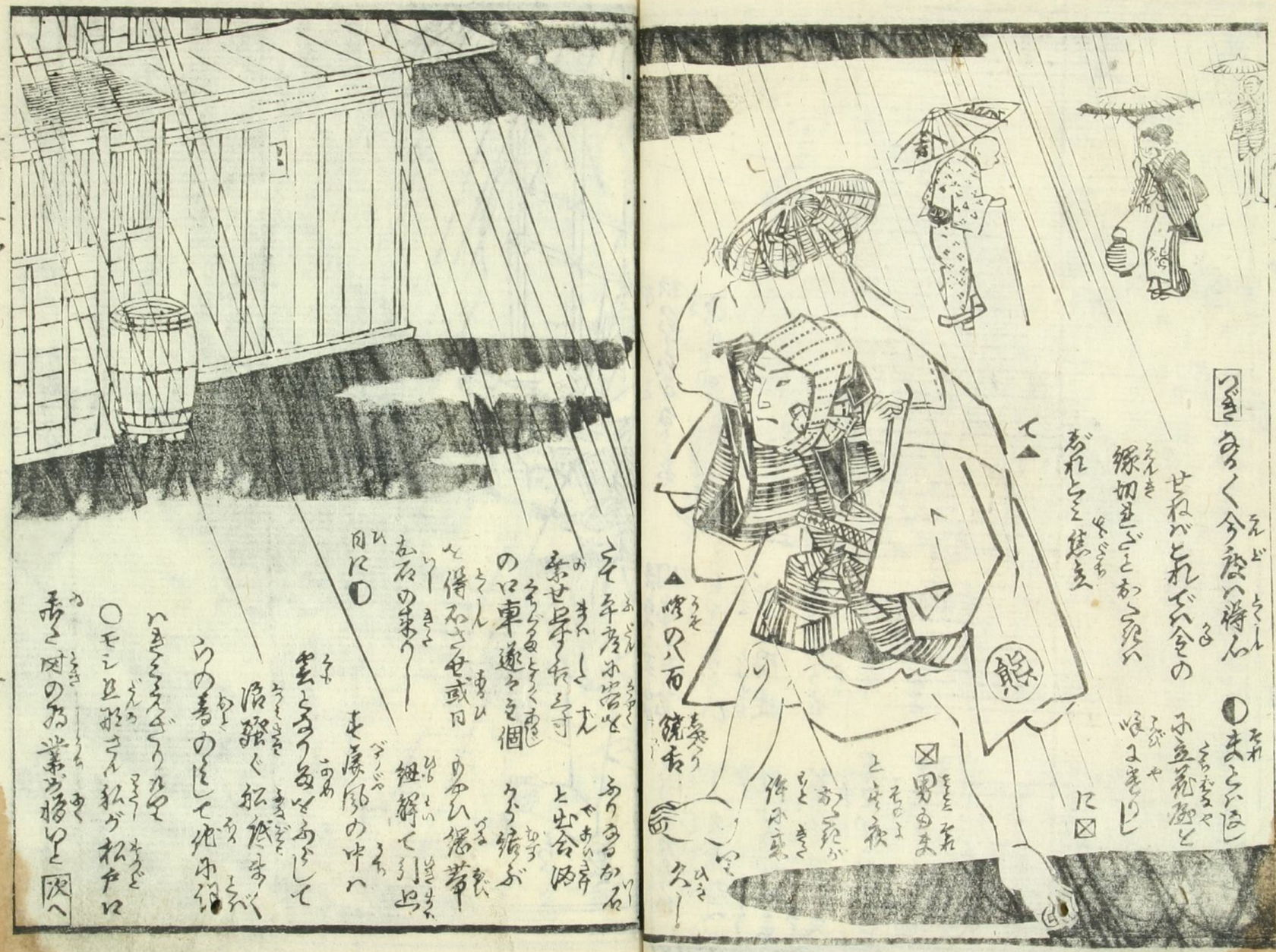
お石の廊陸を

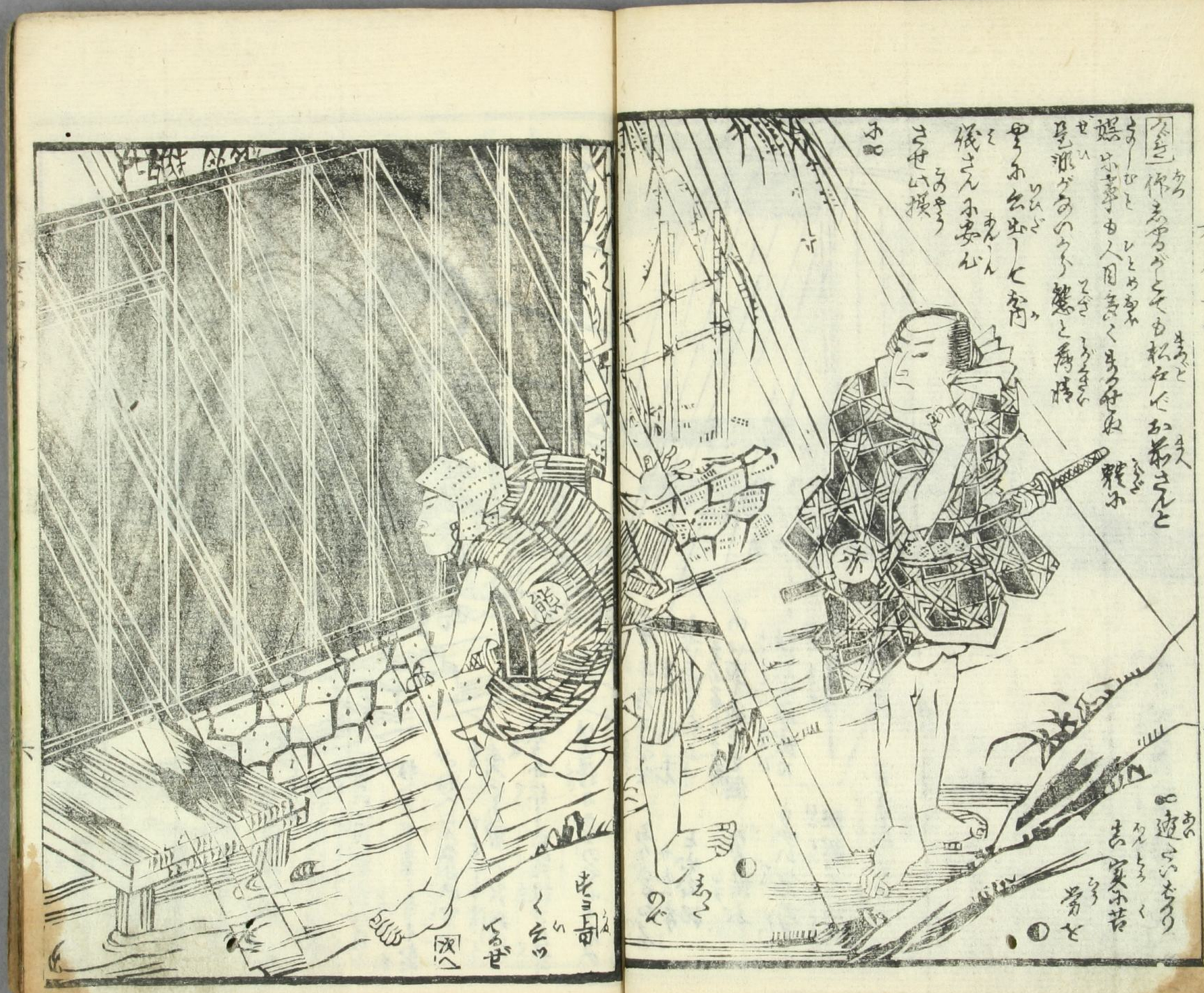
説きる世ビ百人

へ松戸てお石

ホへ絶ちび多

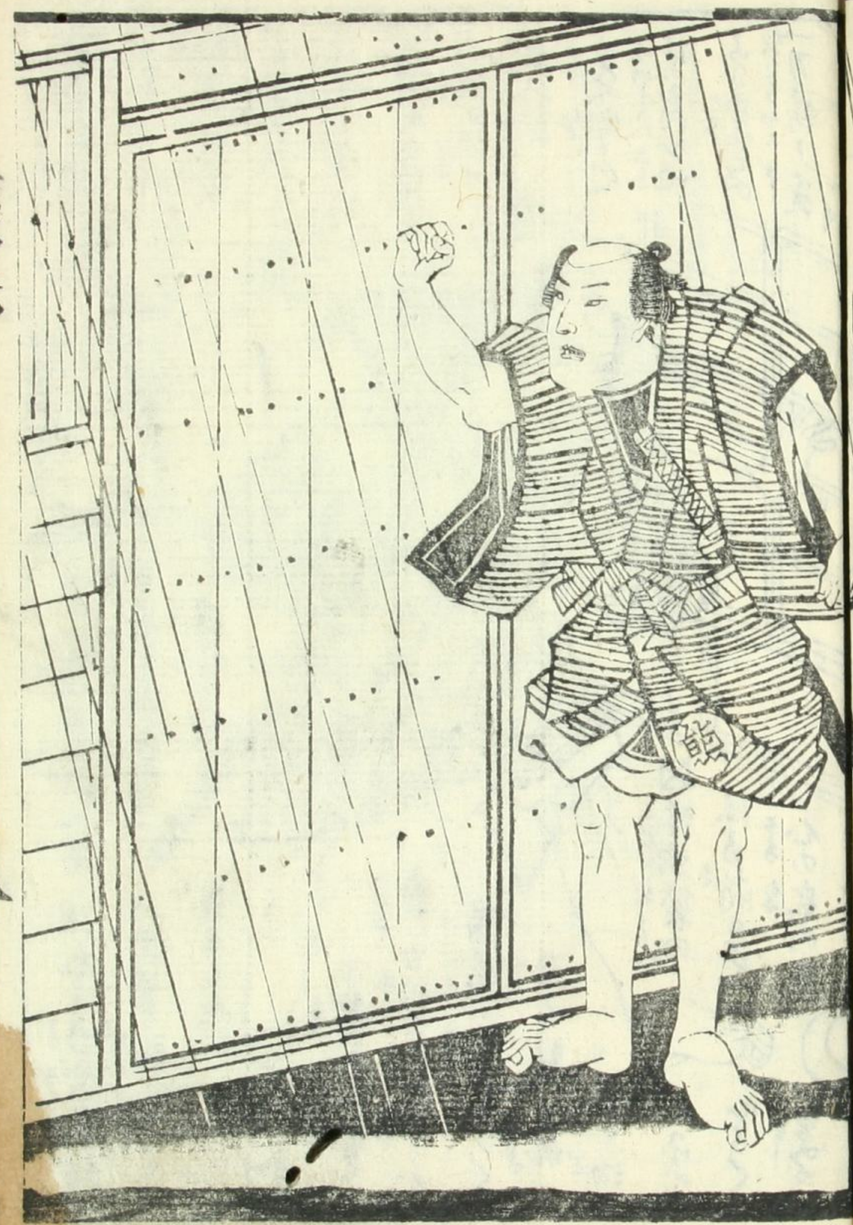
盤を咲さの石 陝へ


つぎ
熊


久さ
仰あるごとくも松五郎お米さんと
媒ふ事も人目多く
見る程あの方の慧と為情
男ふ公出し七宵
俄さん不安心
させ山撰
遊ふ方
吉宴ふ苦
労を
次へ

▲遊さう気分
暖くなると
出て来ると
新しくなるとこの
ゆもの人ねへ何うも
女にかつてこの日ゆ
男ハ一日金ゆ
ねへ手ヤ事ハ青く
ざねへとんだふ気分
あつても男の出ハ秋の
今ハ新しも実紋さま
ひの様ふるのでせうその

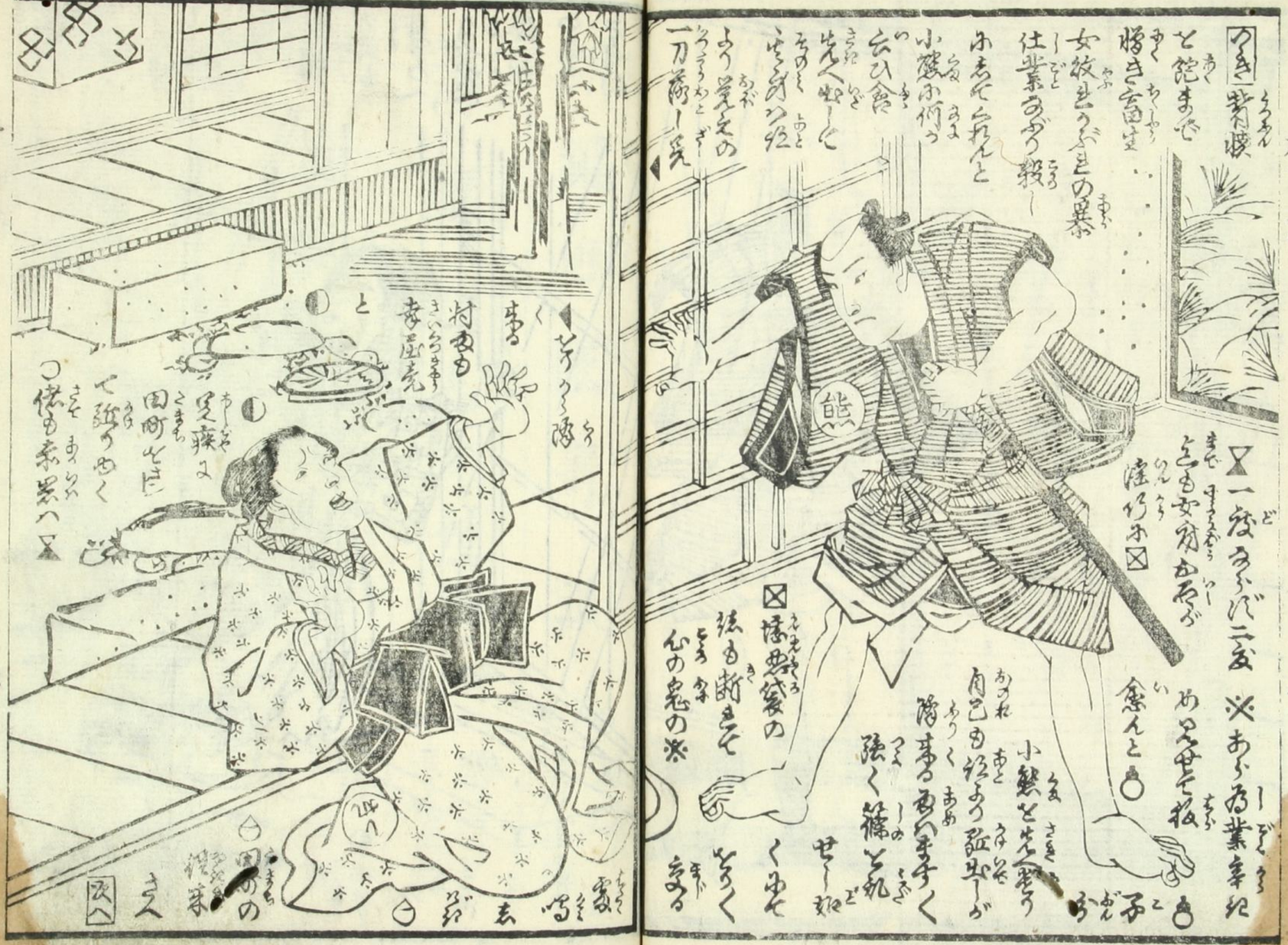
未
若とゆふ気分の男候
えんと成るゆふ勉強ゆ
又日ハ不ちゃ
と
かくまへ
彩と何ど
ろ家庫が
いやうぐ
こゝとゆふ家ぶ
ちの
計分の
附のるを
あつてえん
ると



いざき「さるぞくの場らしらべへ」「アイ々ゝ申我ち夢
いろうの人間達の物ゝ言わるゝ天幕で風かチヨウく
○藤ゝ海ゝ[illegible]藤ゝ人のつゝ沢やチきゝ人の鬼
又ゝ藤ゝ婦ゝゝ者者ゝ[illegible]ゝ見ゝ強ひ奪ゝ[illegible]
四町の引き茶やゝ密ゝ密ゝ[illegible]ゝ屋ゝ密ゝ密ゝ
合ゝゝ人のゝゝ戸ゝ立られゝ[illegible]ゝ
ゝくゝの風ゝ海ゝゝ赤ゝ岩ゝの吊ゝ小ゝ[illegible]ゝ
ゝゝ密ゝ[illegible]ゝ告ゝる牧ゝ赤ゝ岩ゝ
次ゝの引ゝ立ゝ[illegible]ゝ
二段ゝゝ己ゝ

面ゝ泥ゝ[illegible]ゝ所ゝ[illegible]ゝ
出来ゝ[illegible]ゝ
付ゝ[illegible]ゝ
約束の日の黄昏より[illegible]ゝ
来ゝ[illegible]ゝ
出合ゝ[illegible]ゝ
今夜ゝ[illegible]ゝ

次へ


能

新編西國奇談　廿編　追々出版

薄緑娘志ぐれなみ　八編　追々出版

娘庭訓黄金の鶏　追々出版

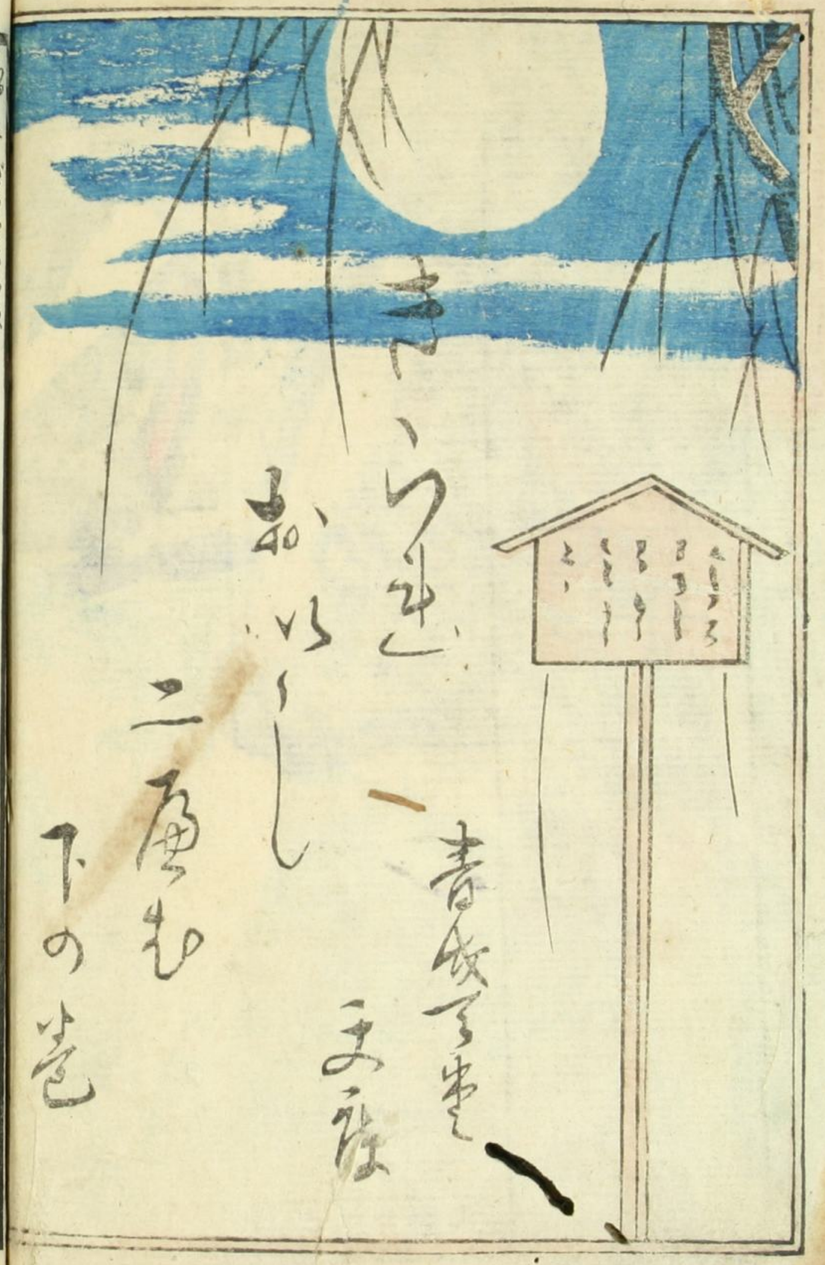
御届　明治十一年十二月十七日

地本錦繪問屋　神田區仲町二丁目六番地　編輯人　篠田久次郎

日本橋區米沢町一丁目七番地　出版人　堤吉兵衛

川周重画
下

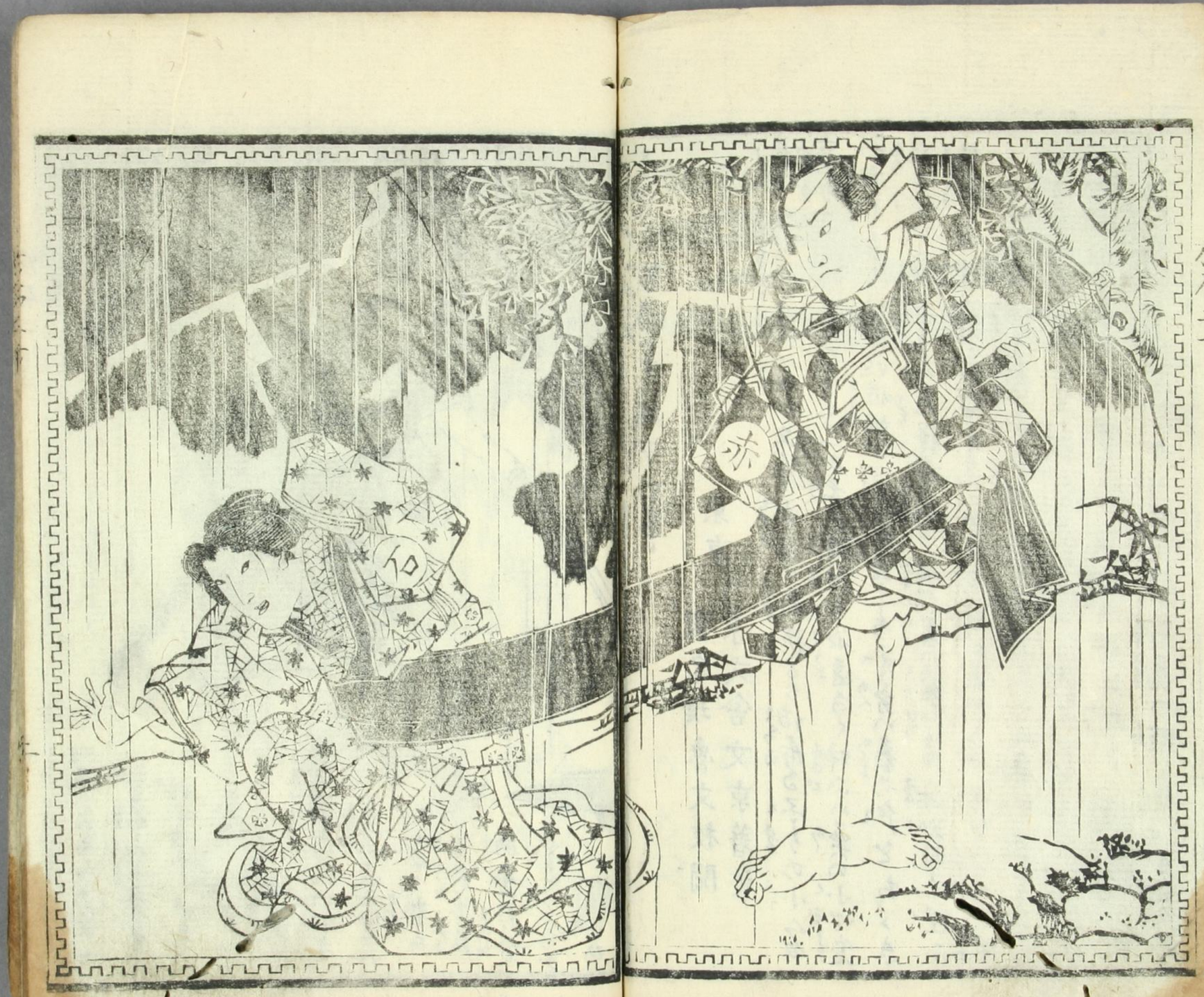
賀
和



冬兒立闇鴉第二編 下之巻

東京　假名垣魯文校閲
京文舍文京著述

扨も主人赤君ハ窺ひ寄る茶屋の行燈の小夜
「祝ふ〻〻」と一番尾いどりゞ「お前の服装ハ お遠ふく 姉れハ奥の小中袋
で密々ゝ」と西ゝに彼奴ゞ「コリヤ新ぶしつこ方ハ表の戸をたゝき
已の供ひ居る者しゝ左様ア彼奴等ハ裏ハ〻〻逃出ハ大騒ふ
結構へ聽膏を注ぎバッさりとサー芳付き取ゝ〻ナ家を焼ゝ
ー金を表表立別もてゞ恐び入る態とハ表ら取奪結数おいしく
今宵を約せ〜ゆゑモウ人めまるハ〻〻と忍ハいで結ぶびしく
傳の本を永ふ取りて使ゆ濡紀面の夜拵拵ゝ隣ゆ二階ふを
強く三味線ゆ弄ぶ〻〻「ゆんゞ客気の服を思ひ多等の次



赤
熊
石

松戸の主
熊
石

つゞき

わたくし小袋

が有る数ホ「ヲイく

吐家ホ赤黒の市内機

さんが来て居るさうぐ今殺さうが

来ぬさるかく居らぬい投云ッて

ムンと殺に吃驚る蘇くおい〜

お激も猿根裏にの切ヲど

外〜お石ヒ出〜

「ヒとものふ去堤づ〜ヒに

「ヲー合点の殺も深く

逸当白ハ赤黒が「雷生め

勃ちうか〜ふト殺ろみ〜ら見

お石ヒ生ろる心地ものく逸ンとなると

赤黒が襟ぐヒ立ヒ引ッ〜大地よ

慈法せ足下に変

ちぐつと殺ろる

氷のみお石ハ服も

ムレむきえ涙石の

毒婦もつるくと▲

次へ

つゞき

助けておくれとゆふ者もあれ
ば
ゆきて家えねばせ方ヒロリ
とおもゆめ三リヤお石今更改め
いかゝくても不義いせ方ゆ
笑えが
あらう
八百八町ゼ里ゼ方
客を撰
いぐ営業も

図面

図 撞ちち芳へ 逃ることゆふ人の
ちゝ芳を考こ浪
風を吟ツ

てい

ぬんで言へ
脚及ち犯
云ゼ松戸の
苗ウゞ考こ
四ち撰ぬ袋
の秘と考めて
小雑ゆいつけ
ゆびれられこ方
を招きゆ芳の

図 祝
ゆ様と
たてう
ちこ此赤累
の腥ゼ倫ゼ
出方の芳と
鴻幕の果ハ
松戸へゆ元ゼ
磨いこ面と
汚されこ
返報ハ芳五弁とこ方が
生血ゼ絞ツこ上汚ちこ 図

ゼ洗ふと松
戸の容子
ゼ 図

跳弟ゼ
びゆ京へ
約よせる
ちう
罠ぬる
ゆ鍵食
ゼ逃へ
ゼ
ゆゞ
ゆび紙
て音京へ実の
ゆこ立荒屋へ桜ゼ
戻しこ
ゆ

つ者 四町の茶屋が出合場と身へこころ迷入ッちゃッて不管の京の内へ

己が性根魂腐ッて結と研澄ッた山根先の五分試し一寸先へ関の疾小鍛冶の血も涙も家業疾の刃と法とに流れてもたゝぬ芸田川

中きぶらくさぶい料理おかゝ

らうゝと赤石が

のとで

牧者り引拉めが

婦人者

界い一生懸

命なと振

きらり逃出

長五

六寸

断

小行

世話の暮の中ふ

仲で

白

上小塚示の左擂

ぬにろゆるへ情の

山牢欲かトひふ

首へ道誓と親

さび狂を新

白の一ツ長へ月

日のゞ勝をして

竈と成る女歌村

その本文体小深名ある赤

関ふあゝで赤男が性せらせるゝ

親竈しろどゝ世地獄へ逃れ出る

ふろ

ゆと垂

消入で

一下刀ゝと

結りに側

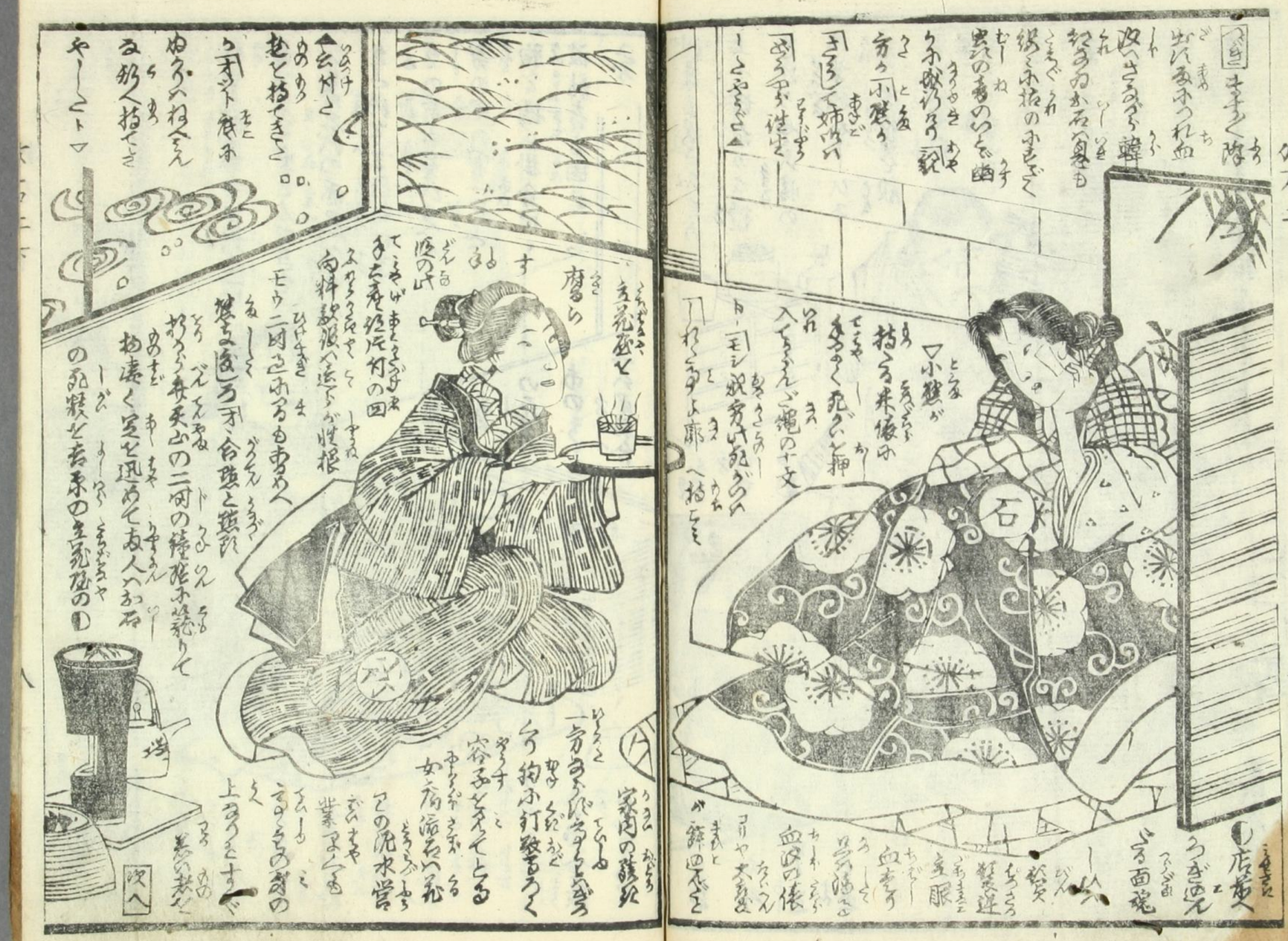
身を起し

でけ返し又

ぶゝきり所定

収滅矣ぎり

次へ



明治三年三月三日　御届
横山町二丁目十七番地
編輯人　渡辺義方
米沢町一丁目七番地
出板人　堤吉兵衛

假名垣魯文校閲
京文舍・文京編輯
守川周重圖畫

繪本太閤記　二編
隅田川月梅若　四編
太閤記切附本品々　郭公逸なぞ切付

御届明治十三年三月三日
東京　地本錦繪問屋
日本橋区横山町二丁目十七番地
編輯人　大阪府平民　渡邊義方
日本橋区米沢町一丁目八番地
出版人　堤吉兵衛

010190511990

冬関立

巻冊之百